

教職課程センターだより 第20号

発行日 2018年11月29日

巻頭言 「この大学来てよかったなって本当に思うよな～」って言われた！

教職課程センター長 山本 敏郎

講義の後の学生たちの会話から紹介します。

- A : 講義の内容が今ある生活と過去の体験に結び付いてきてて、この大学入ってよかったって思い始めてる。良かった。あの時のあの子の行動。はあ？✖じゃなくて、ちゃんと考えてれば良かったなあ。
- B : ねーめっちゃわかる。あたしも今日の講義聞きながら小学校の友達のこと思い浮かべてた、この大学来てよかったなって本当に思うよな～頑張ろ👊(笑)
- A : だよね！！笑 あの時は冷たくしちゃったけど、今考えたらなんか悩んだりしたのかな～とかね😊 がんばろ😊笑

トラブルをよく起こす子どもがいる、「いつもや」「またあいつや」という声が聞こえてくる、放置したらこの子はますます排除される。そのとき学級担任はこのトラブルをよく起こす子どもと、ほかの子どもたちとに共通の生きづらさがあることを察知し、この子どもたちをつなげていくような提案（おしゃべりクラブ）をします。その実践を聞いての感想と対話です。

この会話はこの後Bさんの長い語りが続きます。一言で言うと、こんな場面で自分が排除する側にいたこと、「あの子」にも背景があったに違いないこと、同じような生きづらさがあったかもしれないことに気がついた、そういうことに気がつける教師になりたい！ という語りでした。

講義の後に、「この大学に来てよかった！」などと言われたらサイコーの気分です。そういう気持ちのまま退職したいと思います。

学生たちは学校を「児童・生徒」として12年くらい経験しています。まずその経験は絶対ではないことを、討論しながら知っていきます。制服の学校もあれば自由服の学校もある、自校方式の給食かセンター方式の給食か、掃除は黙働、自問清掃、素手で便器…等々、自分のそれとは異なる他者の世界を知ることになります。講義では、多くの教師たちの実践を紹介しながら理論を語ります。学生たちは理論を手がかりに、過去の経験を見直す作業を始めます。経験の世界から学問の世界にわたって、それからまた経験の世界を見直してみる。経験から学問への「わたり」、学問から経験への「もどり」。この往還のなかで学生たちは「生徒(pupil)」から「学生(student)」に姿を変えます。

学生たちは間違いなく自分が何者なのかがわかり、生き方の羅針盤の形成につながるような理論を求めています。採用試験の合格の仕方や上手な授業の仕方、上手な並ばせ方だけを求めているわけではありません。先日、卒業生がやってきました。初任者研修での話です。

大学で習ったのと同じ学習指導案の書き方を教わった、最初は思い出しながら「そうだった、そうだった」と聞いていたが、しだいに、ここで教わるのなら、大学ではもっと違うことを教えてもらいたかった、大学の講義はこんな講習会のような内容ではなくて、もっと理論的な、考えないといけないような問いかけをしてほしかった、と。

大学でやらないといけないことは、ドアーズのLight my Fireを借りて言うと、Light his/her Fire.邦題のタイトルまで借りてしまいませんか、「ハートに火をつけて」。学生の学びたいというハートに火をつけることがわれわれの仕事ですね。

教員採用試験二次直前対策講座に参加して



先輩方のような教師になり、一緒に働きたい

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修4年 三浦真実

教員採用試験二次直前対策講座に参加してよかったこと、それは、現場で働いている先輩方からお話を聞いたことです。試験対策の話はもちろんですが、先輩方が実際に4月から学校で働き、子どもたちと日々関わるなかで感じていることの話が印象に残っています。教師になりたいという気持ち、試験への決意が高まりました。

午前の全体会では、来てくださった先輩方と山口先生から、試験へのアドバイスをいただきました。午後の体験講座は個人面接・集団討議・場面指導・模擬授業の4つの講座に分かれ、先輩方、先生方にご指導いただきました。私は、個人面接・模擬授業の講座に参加しました。個人面接では、友人と練習する中では味わいにくい緊張感の中取り組むことができ、表情や姿勢などの細かいところまでご指導いただきました。これをきっかけに、自分の軸をもう一度考え直すことができました。模擬授業では、実際に授業を行い、授業・指導案を練り直すことができました。友人と練習したときには気づけなかったこと、授業で使える技、留意点など、今後に繋がるアドバイスも頂きました。また、他の人の授業を見る中で学んだり、自分の強みとなる持ち味にも気づいたりすることができました。

この講座に参加して、先輩方のような教師になり、一緒に働きたいと強く思いました。この日先輩方のお話を聞いて感じたこと、子どもたちと学ぶことへの期待感を忘れず、今後頑張っていきたいです。

【愛知県・神奈川県の小学校合格】

同じ志をもつ仲間とともに支え合う思い高まった

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 H・H



教員採用試験二次直前対策講座は、これからも続いてほしい講座です。現場で教員として活躍されている先輩方から話をうかがえる機会は、教員を目指している学生にとって、大学生活を通して限られているからです。そのため、本講座に参加できたことは貴重でした。

午前の全体会では、先輩方から受験アドバイスをいただきました。経験を交えたアドバイスは試験当日をイメージすることができ、分かりやすかったです。先輩方のアドバイスに現れる熱い思いから、パワーをいただきました。そして、子どもたちと日々、生活されている先輩方の姿は生き生きとしていました。その姿にあこがれながらアドバイスを聴いていました。午後の体験講座では、自分自身がレベルアップしたいと思った場面指導と模擬授業の講座に参加しました。この日を、二次試験当日だと自分自身の中で決めて講座に参加しました。試験官を先輩方がしてくださり、試験当日の雰囲気を感じることができました。準備をし尽くして臨んだことで、試験当日までの課題を確認することができました。本講座全体を通して、「自分が話したいことを話すのではなく、何を他者に伝える必要があるのかを考えて話すこと」が大切だと学びました。

本講座のまとめにあたる決意交流会では、先輩方に続いて来年この場に立って語りたい決意をもちました。そして、残りの期間を同じ志をもつ仲間とともに支え合い、進んでいきたい思いを高めることができました。後輩のために当日、遠方から駆け付けてくださった先輩方ありがとうございました。

【愛知県の小学校合格】



合格体験記 北海道・埼玉県・愛知県（小学校）

3つの教員採用試験を受けて

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 天野 愛佳

私は高校3年生の時から絶対に教員になりたいと思ってきました。結果としては北海道・埼玉県・愛知県3つの自治体で合格し、その中でも北海道教員となることを決めました。教員採用試験を受ける前までの私はなるべくたくさん試験を受ければ合格する確立も上がるのではないかと考えていました。そして、3年生の時にホースセラピーの研修として行った北海道と埼玉県の土地柄がとても気に入ったため、この3つの教員採用試験を受けようと決心しました。しかし、3つの試験を受けたことは本当に大変で何度もくじけそうになりました。そんな中でどのように試験に取り組んだかまとめたいと思います。

まず、試験に向かい合い始めたのは3年生の12月頃からで、愛知自主ゼミを立ち上げて徐々にメンバーを増やしながらかん願書を書いたり面接練習をしたり過去問を解いたりしました。また、2月からCDPなどの対策講座が始まり勉強を始めましたが、まだその時は教員採用試験にどのような分野があるのか、受験する自治体にはどの分野があるのかよく理解しないままになんとか勉強をしていました。それでは不安だったので春休みの間は各自治体の教育に関わる情報を調べて自治体ごとにファイル作りをしました。4月になり各自治体から受験要綱が出始めてようやく試験で何が問われるのか理解をして願書作成や試験勉強に打ち込みました。しかし、3自治体の願書作成は想像以上に大変で、もともと文章を書くことが苦手だったために4月後半から5月の終わり頃まではずっと願書の書き直しをして試験勉強にほとんど手がつかない状態でした。そんな中、最初の試験である北海道の教員採用試験が残り1ヶ月を切ったところでやっと勉強に戻ることができました。サークルや友人の問題の解決、卒業研究なども両立しながらの試験勉強や面接練習は常に不十分さを感じていましたが、試験までにできることを精一杯努力して合格をもらうことができました。

次に、各自治体を受験するにあたって発見したことや苦労したことを簡単にまとめたいと思います。勉強に不十分さを感じていた私は、過去問分析を自分なりに行き、山を張ったところを中心に勉強をしました。北海道と埼玉県は非常に傾向が掴みやすく、予想していた問題もいくつかあたりました。反対に愛知県は傾向が掴めなかったため、2自治体の問題でできなかったところを復習して苦手をなくすように努めました。苦労したのは北海道と埼玉県は自分1人で行かなければならないことでした。北海道は試験よりも1人で飛行機に乗って帰るといえることができるのが不安でした。（2次の帰りには電車に乗る感覚で飛行機に乗れるようになりました。）埼玉県は過去に受験者がいなくて情報も少なく合格も難しいだろうと感じていたので自信をあまり持てませんでした。しかし、どの自治体でも頑張ることができたのは他の受験者と会話をして不安を減らすことができたからです。自分だけ愛知県出身でアウェー感がありながらも、コミュニケーションが好きという性格を生かして自分の周りにはいる受験者と仲良くなったこと（試験終わりに一緒に帰ったりごはんを食べたりしました）が試験を乗り越えられた力の1つであると考えます。

最後に、教員採用試験を合格することができたのは自分1人だけの力ではなくたくさんの支えがあったからということをお伝えたいです。自主ゼミのメンバーや講座をしてくれた先生方、家族、友人などたくさんの人と練習を重ねたり励まされたりしたからこそ最後までくじけずに取り組むことができました。私の体験談で言うと、北海道の水泳の実技対策のために同じサークルの友人と後輩（元水泳部）に泳ぎを指導してもらったり通っているいくつかの病院の先生から診察のたびに応援してもらったりしました。本当に多くの人に支えてもらったためしっかり感謝するとともに、4月から教員として子どもの前に立つことを強く自覚して残りの時間を過ごしていきたいです。教員としての資質をより高めたいところですが、大学を卒業できなければ意味がないのでこれからしばらくは卒業研究に打ち込んでいきます。



合格体験記 神奈川県・愛知県（特別支援学校）

楽しかった教員採用試験…！？

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修4年 千葉頌子

特別支援学校の教員になろう！と決意した高校3年生の冬から、早くも3年半以上が経過した。そして今年度、私は神奈川県と愛知県の教員採用試験を受験し、幸いにも両県とも合格の通知を手にすることができた。この結果は、モチベーションの浮き沈みが激しい私にとって、一人だけの力では到底なしえなかったものだと感じている。一緒に試験対策に臨んできた友達や先生方、またこれまでに出会ってきた人の存在があったからこそこの結果ということをかみしめて、感謝の気持ちを忘れずにいたい。

採用試験を徐々に意識し始めた頃、私は“また”受験生になることを億劫に感じていた。それは、高校3年生で経験した受験が、毎日が追い込まれたような気持で苦しい記憶でしかなかったからだ。しかし、実際に今、教員採用試験を終えてみて思うことは、高校時代のような苦しさを感じなかったということだ。まったく苦しいことはなかったかと聞かれたら、模試の点数がなかなか伸びないとか、細かい法令を覚えられないとか、細々とした悩みはあったが、苦しすぎて逃げ出したいような気持になることはなかった。むしろ、楽しさを感じる場面がたくさんあったようにさえ感じている。高校生と大学生の自分は、双方とも今後の人生がかかった局面というのは共通している。しかし、なぜ大学生の自分は受験生を楽しむことができたのか改めて考えてみた。いくつか理由を考えてみた結果、1番自分が納得して領けた答えが、「これまでの自分の経験と出会い直す」ことができたからというものだ。大学に入学してから、私は特別支援学校の教員になりたいから学校関係の経験しかしたくないなんてことはなく、自分が面白そうだと思ったことは積極的に首を突っ込んでいった。そのため、いざ人物試験の対策で自己PRをする際に、自分が経験してきたことが幅広過ぎて、何を伝えればよいのか分からなかった。しかし、教員採用試験では、人物試験でこれまでの経験を踏まえて自己PRする場面が多い。私は、自己PRで熱意を伝えられるように、これまでに自分が積み重ねてきた経験を改めて丁寧に振り返ってみた。すると、その時には気付かなかったことや自分のなかに新しい価値観が芽生えていることに気付くことができ、とてもわくわくした気持ちになったのを覚えている。私はこのような、当時は気付かなかった価値観を見出せることを「経験と出会い直す」ことだと感じ、これこそが大学生の自分が受験生を楽しめた1番の理由だと思った。

教員採用試験では、合否の結果がでるためどうしても人物試験の望ましい解答例なるものがたくさん存在する。こうした、解答例を参考にすることは試験対策上、大切な1つの手段ではあると思うが、私はこれまでの経験とじっくり向き合いながら、自分の言葉で自分を語ることが、これからの学びの可能性も広げていくのではないか感じる。私は、教員として、子どもと自分自身と向き合いながら、学び続けていけるような人でいたいと思う。



合格体験記 千葉県（高校）

社会福祉学部 社会福祉学科4年 佐竹 名菜

1.はじめに

私は愛知県と千葉県の教員採用試験を受験しました。愛知県を本命としていましたが、私がめざす高校福祉科の採用人数は少ないことと、いきなり愛知県を受ける不安から千葉県の受験も考えました。千葉県を選んだ理由としては、愛知県より前に試験が実施されることと、試験内容が、私の苦手としていた一般教養試験の配点が少ないことで決めました。最終的には愛知県は落ちてしまいましたが、千葉県に合格したことで自分に合った試験内容の自治体を選ぶことができたことが、合格するためには良かったと思っています。

2.試験対策

千葉県の試験内容としては、1次試験に教職教養・一般教養・専門教養・集団面接。2次試験に個人面接・模擬授業・実技試験・適正検査が行われました。1次試験の教職教養は基本的にCDP講座と大学で行われた対策講座に出席し、教えてもらった範囲をまずは覚え、過去問もやりました最後は暗記Bookを購入し暗記することを徹底しました。一般教養は苦手な分野だったので得意科目である数学や、出題範囲が固定されていた国語を中心に勉強しました。専門教養は、高校時代に介護福祉士の資格を取得していたため一般と教職教養よりは勉強量を減らし、最後の1か月くらいで介護福祉士国家試験の過去問と愛知県と千葉県の専門教養の過去問を解きました。集団面接は、大学の対策講座で行ってもらいました。2次試験の個人面接・模擬授業は、高校の頃の恩師である先生に指導していただきました。実技試験は、介護福祉士の資格取の時に学んできましたし、現在介護福祉施設でアルバイトしているため自信があったので前日に実践Bookを見返しました。

3.試験当日

当日、知り合いがいない状況で不安な気持ちがありましたが、ほかの受験者の方が話しかけてくださいました。2次試験は午後から実技試験だったのですが、昼食の控室が高校福祉科を受験する人だけだったためリラックスして実技試験に臨めました。1人で不安な時こそ、同じ受験生はライバルになるかも知れませんが、交流をすることが必要であると感じました。また、千葉県の模擬授業の試験は受験性が生徒役であったので事前の関係性が重要だと強く思いました。

4.最後に

私は社会福祉学部で、高校福祉という枠なので、仲間と呼べる存在が1人しかおらず、教友ゼミというものもありませんでした。けれど、教職を目指す仲間だけでなく、専門演習の仲間や部活動、友人、家族などの応援や支えのおかげで合格できたと思います。試験まで大変なこともあるとは思いますが、1人では限界もあると思うので、自分の周りを頼りながら是非最後まで諦めずに頑張ってください。



合格体験記 長野県（高校）

国際福祉開発学部 国際福祉開発学科 4年 佐藤 星

① 受験対策・勉強法について

最も力を入れて取り組んだことは、専門科目である英語です。教育実習を終えた4年の後期から約1年間、アメリカ留学をしました。教員になったら英語で授業をしなければならず、特に高校英語は中学英語よりも難しくなり、自分の語学力を高め、色々な経験をしたいと思ったからです。専門科目の勉強は、アメリカの大学での授業を受ける中で読み書きの力と話す力を身に付け、昨年度までの試験問題を解きながら問題に慣れていきました。テキストは協同教育研究会出版の、受験する県の参考書と過去問題集を使っていました。教職教養と一般教養の対策についても同様のテキストを使用していました。専門科目に力を入れていたため、教職教養・一般教養は過去問を解き、間違えたところや分からなかったところを参考書で見直すようにしていました。

模擬授業と面接対策は、教育実習先でもあった母校の先生方をお願いをして協力をしていただきました。模擬授業については、先生方がどのような出題をされたかを聞き、学内の模擬授業や教育実習で使用した指導案を振り返りました。面接対策は校長先生、教頭先生が快く引き受けてくださり、試験前に提出しなければならなかった面接カードの添削や、実際の面接を想定した模擬面接をしてくださいました。

② 実際、受験してみて得られた知見や教訓、後輩へ伝えておきたいこと

受験当日の朝、電車に乗り同じ受験者と思われる人を見つけると一気に緊張が増し、会場が近づきスーツ姿の人が増えるにつれ、その緊張と不安はピークになりました。しかしそんな時でも、落ち着いて冷静でいることが大切だと思いました。気負い過ぎず、リラックスした状態で臨むことができれば良いと思います。私が平常心を保つために意識していたこととして、挨拶をするということが挙げられます。数日間に及ぶ試験日程で、同じ科目の人の顔はお互いに何となくではありますが覚えます。おはようございます、お疲れ様でしたなどと言うことで緊張をほぐすことができました。また、試験会場や会場までの道中の暑さ対策も必要だと思います。

この教員採用試験を通して、尋常ではない暑さと緊張感のある中、いかに集中力を保つかということの難しさを感じました。元々集中力が乏しかったため特に苦勞したところだと思います。日頃から鍛える訓練をもっとしておけばよかったと反省しました。そして何より、体力的にも精神的にも大変な試験だと思います。不安な気持ちはありますが、試験前日は早めに休み、万全な状態で受けることが大事だと感じました。



卒業生からのたより

一步一步

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修 2017年度卒業
愛知県小学校教諭 奥山 遥

私は、2018年3月に日本福祉大学を卒業し現在、愛知県の小学校教諭として働いています。教員生活がスタートし右も左も分からなかった4月から、あっという間に半年が経ちました。毎日あわただしい生活は変わりませんが、15人の元気な3年生と楽しい日々を過ごしています。

私は、始業式のときにはじめて出会った3年生の子どもたちの目を今でもわすれることはできません。その目は想像以上にきらきらとしていて、新しい学年、新しい教室、新しい先生に期待をしているような目でした。その様子を見て、さらに緊張したもののこれからの教員生活にわくわくしたのを覚えています。

学校生活が始まると、教員として日々取り組むことは山積みでした。毎日の授業、給食、そうじ、授業参観、研修など最初は目が回るような日々で、その日その日をとにかく必死に生きているようでした。毎日、落ち着きのない生活で心の余裕もなく、いつの間にか眉間にしわをよせている自分がありました。子どもたちは、そんな状況の私にすぐ気が付きます。不安そうな顔をして「先生、最近いつもよりこわいよ。」と言われたときにはっとしました。私の余裕のなさは子どもたちに伝わっていたのだと気が付き、申し訳ない気持ちと反省の気持ちでいっぱいになりました。その時からです。毎日どんなに落ち着かなくても、子どもたちの前では自信をもって笑顔で過ごしていこうと思っています。そう考えながら日々過ごすことで子どもにも伝わっているのか、子どもの笑顔が増えたりクラスの雰囲気も明るくなったりしたような気がします。そんなこともあり、毎日、経験したことのない出来事がたくさんありますが、学校に行きたい、早く子どもたちに会いたいと思えるような充実した日々を過ごすことができます。

また、この半年間教員として生活してきて、自分の授業や指導を見つめなおすことが増えました。多くの先生の授業や学級を拝見させていただき、考えもしなかった取り組みや私も受けたくなくなるようなすてきな授業を目の当たりにします。それを見て、上手くできない自分に落ち込むこともありますが、もっとあの先生のようにになりたい、もっとすてきな授業や指導をしたいと思うようになりました。そして、日々子どものことを考えながら生活していることに気づき、自分が先生なのだを再確認することもあります。たくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいの半年間でした。

毎日悩み、反省することの繰り返しですが、この仕事にとってもやりがいを感じます。子どものちょっとした変化に喜びを感じたり、もっと学びたい、挑戦したいという感情を日々かき立ててくれたりする職業です。挑戦することや感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思います。子どもや周りの先生から学ぶことを大切にして一步一步すてきな先生になっていきます。





これまでの出会いを糧に、日々成長

社会福祉学部 社会福祉学科 2014年度卒業

愛知県高校福祉科教諭 吉田 歩美

はじめに ～ 自分について ～

2014年度に日本福祉大学社会福祉学部を卒業し、2015年度4月から愛知県で高校福祉科教員として働き始め、今年で4年目です。本年度から、初任から3年間お世話になった学校を離れ新しい学校に赴任しました。昨年度までの3年間は専門科福祉科で、今年度からは総合学科の福祉プランで生徒に福祉を教えています。

福祉科教員の仕事

福祉科は、誰もがその人らしく生活できるようにするために必要な知識や技術を学び、その態度を養う場です。福祉＝介護のイメージが強いかもかもしれませんが、それだけではありません。私は生徒に福祉を教える際、「人と関わる時の姿勢や、その素晴らしさ」をしっかりと伝えることを意識しています。福祉科教員の仕事として、まずは学習指導があります。歴史や制度等を学ぶ座学と、利用者の状態に合わせた介護技術を教えます。校外実習の指導では一人ひとりがしっかりとした目的意識を持ち、学びある実習ができるように事前・実習中・事後の各指導がとても重要です。また、介護福祉士国家試験や介護職員初任者研修など資格取得にむけた指導が必要な学校も多くあります。生徒個々の思いに寄り添いながら、学習面だけでなく、心のサポートを行うことも大切な仕事です。

教員4年目を迎えて

私はこれまでの教員生活でとても多くのことを学びました。正直はじめは、上手く出来ないことの連続で、自分自身の成長を感じることも全く出来ませんでした。しかし、そのような中で私を支えてくれたのは他でもない生徒の存在です。『この子達のために頑張ろう』そう思える生徒と出会えたことが、教員になって良かったと感じたことの1つです。先にも述べたように、私は今年度から新しい学校で働き始めました。新たな環境に向かう私を力強く後押ししてくれたのも生徒の存在です。「一番私たちに寄り添ってくれたのは吉田先生だった」「いつも味方でいてくれてありがとう」。自分がやってきたことは間違っていなかったのだと実感できました。教員は決して楽な仕事ではありません。嫌になることだってあります。しかし、それと同時に素晴らしい仕事だとも感じます。良いことも悪いことも全てが自分を成長させる大切な出会いです。上手くできなくても、その姿を見守ってくれている人もその成長を評価してくれる人もいます。自分自身も成長しながら、また生徒の成長をすぐ近くで見ることができるととても魅力的な仕事です。

最後に ～ 学生のみなさんへ ～

私が教員を目指す多くの学生に伝えたいことは、学生であるうちに「多くの人と出会い、たくさんの経験を積んで欲しい」ということです。私は大学生の時、知的障害者ボランティアサークルに所属し、さらにオープンキャンパス学生スタッフや適応指導教室でのメンタルフレンド活動、大学生協学生委員会の活動、障害児放課後デイサービスのアルバイトなどを行っていました。それらは福祉科教員として必要な知識や技術を養うことに加え、人前で話をする力やコミュニケーション力を向上させることにも繋がりました。教員採用試験の面接はもちろん、実際の授業や生徒との会話のネタにもなります。日本福祉大学には、経験値をアップさせる機会がとてもたくさんあります。「時間がないから」「勉強が忙しいから」と、その機会を活用しないことは非常に勿体無いです。学生のうちにしかできない経験をたくさん積んで、今後の糧にしていってください。同じ教員として、教育現場で出会えることを楽しみにしています。





子ども発達学部 心理臨床学科 2016年度卒業
岐阜県特別支援学校教諭 宮下藍子

「咲く種類もタイミングもそれぞれ 個性あふれる子どもたちを育てられる 桜の木のような教師になる。」そう決意をし、大学を巣立ってから早2年と半年。学生のみなさんはいかがお過ごしでしょうか。平等に与えられた時間の中で、夢や目標に向かって励んでいる人、夢や目標を模索している人、迷っている人、悩んでいる人、それぞれいろいろな想いや事情を抱えて「生きている」のではないのでしょうか。私は、現在、岐阜県にある、病弱教育を主とする特別支援学校で、子どもたちと充実した日々を過ごしています。これから、私が「生きている」世界を、皆さんへ少しですが伝えたいと思います。

大学4年生の卒業式前日。赴任校が決まり、「病弱」という言葉への不安や緊張を抱えながら引越越しを済ませ、4月を迎えた事を覚えています。準ずる教育から自立活動を主とする教育を受ける、幅の広い子どもたちが待っている。病気や障がいから不安を抱えている子どもたちと、どう関わるのだろうか。やる気はあるけれど、私にできるのかな……。そんな想いでいっぱいでした。しかし、その不安は温かい職場の先輩方や同期の存在によって、すぐに解消されました。「初めから完璧な教師などいない、先輩や子どもたちから、学び続ければいい。」そう言葉をかけてくださったのです。職場の方にも恵まれ、時には仕事の悩みや授業づくりのアドバイスを頂いたり、仕事終わりや休日を一緒に楽しんだりすることもあります。まだまだ初めての事や不安な事はあります。そんな時は一つずつ、周りの先輩方に教えて頂きながら、前に進んでいます。しかし、この職業はいろいろな人に出会うので、中には相性の合わない方がいるかもしれません。そんな時に話せる、学生時代の友人や先生方との関係を今のうちから大切にできるといいと思います。

仕事をしていると、いろいろな人や経験に出会い、別れ、喜びや悲しみがあります。壁にぶち当たることもたくさんあります。私も今の職業が向いているのか、力不足に悩むこともあります。そんな時は自分のペースを知り、時には遠回りしてみたり、寄り道や休憩をしてみたりするもいいと思います。本校には、身体の病気だけでなく、こころの病気と闘う子どもたちもいます。自分のペースに合わせた「生き方」を見つけ、上手に付き合っていく大切さを、改めて子どもたちに教えてもらっています。アテネの哲学者ソクラテスも「ただ生きるだけでなく、善く生きよ」と言っています。与えられた時間は同じなので、どうせなら有意義に「生きたい」と私は思い、自分が納得できる生き方をしています。

最後にこの原稿依頼のお話をいただき、日々を振り返ることで、この職業は、毎日が輝く宝物であると、改めて感じました。ご縁があった際には、楽しみにしています。学生という貴重な時間を、「善く」生きてくださいね。



スポーツ科学部教員養成の取り組み

教職課程センター委員
岡田雄樹（スポーツ科学部）

スポーツ科学部は2017年度に新設され、2020年度に完成年度を迎える。そのことから学部として卒業生を輩出したわけではないし、当然ながら教員を輩出したわけでもない。前例の恩恵を受けられない我々は今現在試行錯誤をしながら教師、学生共に格闘真っ只中である。

初年度のはじめに「教員免許取得希望者」の簡易調査を行なった。当時は約130名いたが、時間と共に80名ほどとなり、現在では60名ほど（その中の約20名は特支も希望）となっている。その中から「教員志望者」の割合も調査することにし、その結果は30名弱であることが把握された。これが教職担当教員の比率から考えて、多いのか少ないのかはこれからの検討事項であるが、少なくとも対象学生には学部として支える必要がある。

そこで今現在「スポーツ科学部教員養成の取り組み」組織は、教師教育チーム（教職チーム）と教員採用試験対策チーム（キャリアチーム）の二つに分かれ活動を行なっている。教師教育チームは「教職カフェ」というものを開き、①教師になるにあたっての心構え②教師の仕事理解③教師になるまでの展望（4年間の計画を立てる）④教育実習に向かうための準備⑤履修カルテの意義や方法の説明、などを行なっている。教員採用試験対策チームはその名の通り「教員採用試験対策」講座を開き①専門教養、教職教養、一般教養、小論文、面接、実技などの傾向と対策②教員採用試験に向けてどのように勉強していけば良いのかの検討、などを行なっている。どちらにも共通していることは、これらは任意であり強制的なものではないということである。その是非もこれからの検討課題としている。加えて「養成」と「採用」の関係や方針も現在進行形で引き続き検討していきたい。何はともあれ、来年度は一期生が3年生となる。実習なども始まり本格的な取り組みが必要となる。

教育実習体験報告

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 4年 北原あすか

私は、5月から6月にかけての三週間、長野にある母校の中学校で教育実習をさせていただきました。

1～3年生に合計で10回授業を行いました。事前訪問の時点で、明確に範囲が分かっていなかったの
で事前準備もほとんど出来ず、実習中は毎日家で眠い目をこすりながら教材研究を行い、指導案を作っ
ていました。実際授業を行うと、授業の進行ばかりに気を取られてしまい、生徒が「わかった！」と思
えるような授業は行えていなかったです。しかし、私の拙い授業を真剣に聴いてくれたときやたくさん
挙手をしてくれたとき、もっと生徒に分かりやすい授業をしたいと思いました。どうやったら授業で生
徒を惹きつけることができるのか、担当の先生や同じ社会科の先生に積極的に聴き、アドバイスを授業
に取り込んでいきました。一回一回行う授業は違うので、一つの授業を改善するというのは困難でした
。しかし、回数を重ねるごとに生徒の反応がよくなり、私自身授業を行うのが楽しいなと感じました。
担当の先生から、授業は下手でも授業者本人が楽しんで行うことが大事だと言われたので、これからも
忘れないようにしたいと思います。

中学校での教育実習を通して、授業だけではなく先生たちの生徒との関わり方や仕事を間近で見て学
ぶことが出来ました。先生という仕事は想像以上に大変です。教育実習で得た
学びを教員になったときも思い出し、子どものために成長し続けたいです。





教育実習体験報告

経済学部 経済学科 4年 河合俊宏

私は三週間、教育実習に行きました。教科は世界史A、Bを担当し、担任は一年生のクラスでした。

一年生は高校受験が終わり、解放的な気分になっているために元気がいっぱいでしたが、塾講師の経験があったので焦ることなく対応することができました。

最初の一週間目は、月曜日、火曜日共に一年生がスプリングキャンプで居なかったこともあり、主に授業参観でした。社会の授業だけでなく、英語や国語の授業も観に行き、自分が授業をするクラスの雰囲気をつかむことができました。

二週間目の木曜日から授業を行いました。しっかりとした授業が出来ずに落ち込みましたが、初週の二日目に授業をしていた同じ三週間の実習生二人と一緒に反省を行っていたこともあり、すぐに切り替えて次の授業に向けての準備に取り掛かりました。

この週から八時出勤二十時退勤が当たり前になりました。他に実習生が五人居たこともあり、互いに相談をしていると外が真っ暗になっており、家に帰っても土日でも、実習生同士でLINEを使って授業について相談をしました。

三週間目は主に授業を行った週でした。授業は全て午後に行う形だったので午前中に授業準備の細かな部分を調整して午後の授業に臨んでいました。

教科、担任の担当の先生が同じ先生だったこともあり、時間をかけて様々なことに対してアドバイスを求めることが可能だったことは恵まれたと思います。また、教育実習生同士で仲良くしていたこともあり非常に楽しく教育実習期間を過ごせました。





教育実習体験報告

人とのつながりで人を育てる

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 4年 鎌田彩矢佳

特別支援学校の実習は、中学部2年生を担当しました。私が取得する予定の基礎免許は小学校ですので、中学部を担当すると知ったときは不安でいっぱいでした。しかし、実習終了後の今、中学部が担当で本当によかったと心から思います。中学部は、自立と社会参加を大きな目標に高等部や社会へつながる学びを積み重ねる期間なのだと知ることができたからです。それは、小学部の子どもたちの指導の方向性を確認する機会にもなりました。自分で先生に助けを求めたり、自分で悩みながらも取り組んでみたり、という子どもの自分でできる状況づくりをするためには、歩み寄って声を掛けたい気持ちは抑えて「待つ」、という教員側の課題の難しさも実感しました。

特別支援学校の1日は学部・学年・学級の打ち合わせから始まります。私は、昔から先生同士の連携に憧れていたこともあり、この実習では積極的に先生方とコミュニケーションを取るだけでなく、先生同士がどのようにコミュニケーションをとっているのか丁寧に観察することを心掛けました。情報共有、共通理解をするために、すぐ伝えられることはその場で、丁寧に伝えたいときは時間を合わせて放課後に、そのようにやり取りしていました。先生同士のコミュニケーションがどれだけとれるかが子どもたちへの一番の支援につながる、そう感じました。

研究授業では、「登校～朝の会」を扱いました。朝の会の進行も係活動も日々の積み重ねをもとに、スムーズに動いていく子どもたち。一人一人の課題を明確にし、課題達成への支援を考えていくと、スムーズに動いているように見えるだけだったり、課題がその子に合っていないものだったり、見直すことができました。また、実習ということで、どこかはりきりすぎてしまう自分がいて、支援を考えるときに、やたらに新しいものを取り入れようとしていました。そのとき、指導教諭に「支援は、方法は同じでも子どもの状態、タイミングや声の調子で全く別の支援方法になる。もちろん先生によっても変わる。無理に新しいやり方ばかりを求めずに、目の前の子どものように合わせて少し手の加えた支援をしていったらいいんじゃないかな。」と指導をいただきました。大きな変化を求めようとして大きな改革をしたり、確実に進むために重みのある飛び石を均等に置いたりするのではなくて、向かうべき場所を見定めながら少しずつ試行錯誤しながら、斜めにもまっすぐでも前に進んでいることを振り返ったときに実感できれば素敵だな、そのように私も進んでいきたいと思えるようになりました。後ろを振り返るのが楽しみになるくらい、たくさん迷いながら前に進んでいきたいです。

今後の予定

【2・3年生】

教員採用試験合格体験報告会

2018年12月 6日（木）13：25～16：30 美浜キャンパス 1511教室

【1年生】

教職課程オリエンテーション

2019年 3月27日（水）4・5限 美浜キャンパス・東海キャンパス

教職課程登録期間

2019年 3月下旬を予定

